

市芦救援会通信

市芦救援会通信 〒659 芦屋市剣谷9 市芦分会気付 0797(32)1131

通巻30号 89/6 (1部100円) 市芦救援会 発行人 玉本 格

日程 第18回審理 7月1日<土> AM10~12
第19回審理 7月21日<金> AM10~12

私の中に生き続ける「市芦」

市芦第一九回卒業生 北尾 京子

「キタセンス、オハヨー」とたどたどしい言葉と笑顔で迎えてくれる子どもが可愛くて思わず笑ってしまう日々の中、乳児院で働き四年余が過ぎた。

働きはじめた頃は、生後一週間も経たない小さな身体に、二四年半前の自分と照らしあわせることもできず、コワゴワながら接していた。

生後間もなく、どこかの病院の前におかれ、必死で泣き叫んでいたであろう赤ちゃん。お腹がすけばゴクゴクと無心にミルクを飲んでいる。その身体からは考えられないほどの生命力に、ふと驚かされたりする。

遺棄、置去、虐待、両親の離婚や家出、病気、ノイローゼ、貧困、サラ金、未婚、未成年の母、等……。様々な事情をかかえながら、乳児院に入所してくる子どもたち。わずか数ヶ月、一歳でありながら、その影響をマドモに受け、様々な姿をみせる子どもたちである。

父親ノイローゼ、虐待、離婚の中、頬に火傷の傷を残し入所してきた子。親からはなれても泣くこともなく、部屋の隅でジッと周囲の動きをうかがっている。言葉も声もほとんど出さず、笑顔もみられない。しかし半月、一ヶ月と経つと、段々と表情もやわらぎ、子ども同士で遊ぶ姿もみられる。それでも、人一倍、はじめての人や場所を不安がり嫌がる姿はなかなか消えることはない。

一歳を過ぎたばかりの、最も甘えたい時期の頃に親と切り離されてしまった子どもに対して、少しでも落ち着いて生活できるように環境を整えていくことが自分達の仕事だと思いつつも、現実はまだまならない。

も／く／じ

私の中に生き続ける「市芦」	市芦第19回卒業生	北尾京子	1
市芦を教育の場として再生させよう		市芦分会	2
「市芦教育改革」の現場から			
私の「救援」通信	市芦分会	吉村士郎	3
喜怒哀楽を共にすること	市芦分会	田辺 哲	4
外科病棟入院生活から	市芦第三回卒業生	井原 健	6
あたり前の労働運動をめざして	全通東灘分会	岡本正一	9
夏期一時金カンパのお願い		市芦救援会事務局	10
学習交流会のお知らせ		市芦分会・市芦救援会	10

二四時間の交替勤務体制の中で、一日のうち何度か職員がいれかわる。夕方、子どもたちが淋しくなるであろう時間帯に職員の手とかが帰っていく。

そんな毎日が繰り返される中で、自分が「親代わり」又「(五年目) 保母」としては、あまりにも未熟すぎるのでは…と思うことも多い。

高校のとき、「責任のもてる保母に」と言った、その自分の言葉の重みを、改めて、痛感してしまふ。

市芦での三年間、私は奨学金をとり、集会、奨学金闘争、「いも虫の唄」の劇、それらを通して、自分が向きあうことがなかった親の働く姿、自分自身を振り返ることができた。

私の隣で、腹だち涙を流し自分の生活を話す友達、自分の生い立ちや生活を話すことで



必死で自分と闘うこと、その中で私は自分が保母になりたいと思う気持ちを同情や夢だけで終わらせたらかんと考えた。

三年間、とことん自分につきあってくれた（のかつきあわされたのか、今だに明確ではないけれど）そんな先生や仲間がいること、それは、今の自分の誇りであり励みであるから。

「しんどいなあ」「もうできない」「みたいに思い、バタバタと過ぎていく日常の中で、「子どもの気持ちのわかる保母に…」など響きの良い言葉のうちにあるものは、どうしようもできない現実にはぶつかって、ため息のする日々。

そんな中でも、子どもはヨチヨチと歩き出し、職員そっくりの口調で話しはじめる。取り合いをしたりケンカをしながら、待つことやゆずることも少しずつわかっていき、子ども同士で通じ合う世界をつくっていつている。そんな子どもはたくましく励まされることも多い。

今、自分の目の前にいる子ども、今まで出

市芦を教育の場として再生させよう

市芦分会

いわゆる教育改革から二年余りの月日が過ぎ去った。その結果、市芦の状況はどれほど

改善されたといえるだろうか。急激に減らされた教員数で強引に実施された選択制をこな

そうとするため、誰もが教材の準備に追われている。せっかくなかった教材も一回限りの授業で御用済みとなり、授業を次の授業に生かすこともできず、各クラスの反応を比較する楽しみもない。授業の活気は失われ、やめていく生徒は櫛の歯の抜けるようにあとを絶たない。実体の希薄なクラスにはそれを止める力はない。硬直した勤務条件はきめ細かい生徒指導を至難のわざとし、処分ばかりが先行している。職員会議の開かれない中では教師がうって一丸となる態勢は望めず、担任の負担は軽減されるどころか、フォローが乏しい分だけますます加重されている。

このような市芦の現状は、いわゆる教育改革が、その名と裏腹に教育への配慮を欠いた全く政治的な動機で行なわれたことの必然的な帰結である。一九八六年の七月、出世以外

このことは眼中にない教師であった男が芦屋市教育長に就任したことから「改革」は始まった。そしてその攻撃が九月に開始されたのも、市議選、市長選が間近に控えていたという、政治的な都合によるものであった。

「市芦教育改革」の現場から

私の「救援」通信

市芦分会 吉村 士郎

四月一日、管理職独断による校務分掌が今年もまた発表された。障害研顧問を続けてきた私は、みごとにせずされ、進路指導部とい

う初めての分掌が与えられた。部長は昨年と同じで、副部長は旧三学年の主任の先生がなっており、二人の先生の手伝いをすればよい

のような詭弁を弄しようとも否定できるものではない。

「教育改革」が教育とは名ばかりの、政治による教育破壊であったことは、いま、芦屋市公平委員会の審理廷で着々と立証され、市教委は強配を正当化する論拠を完全に失ってしまっている。一人一人の教師の身分と雇用を守るものが組合に課せられた基本的な使命である以上、新分掌は公平委員会闘争を今後にも担い続けていこうと思う。そしてそれとともに、管理職による専制的な校務運営を打破し、職場の民主化を目指していきたい。そして、われわれは、逆流に二石を投じることを目指して、すべての教師、生徒、親たちとともに歩みたいと思う。

(市芦分会字報一一三号から)

だろうと思ひ、このあと開かれた社会科教科会議に出席した。

「処分・強配」の弾圧以後、校務分掌はもとより、教師の授業科目さえもが管理職の職務命令で決定されており、今年は何かと教科主任の提示を待った。提示されたものは、各教師の持ち科目と、指定されたカリキュラムの科目数が合わず、教科会議でやり直さないと時間割が組めないものであった。各教師の

持ち科目、持ち時間数を決めるという教科会議がもてたのは、他校の先生が啞然とするであろうが、一步前進ではあった。

「教育改革」の名で大規模受験高校のカリキュラムが小規模校の市芦にそのまま導入され、多岐にわたる選択授業が始められてから、教師の労働過重は目を覆うものとなっている。

教科によっては、三、四科目、十数種類の教材を一週間に用意しなければならぬ。しかも選択授業がほとんどであり、作った教材は一日の授業で終わってしまう。資料の検討や板書・発問の工夫は次の授業に生かされることなく、教材を練り直す機会が与えられていない(このこと一つを取りあげてみても「教育改革」の欺瞞が知れる)。

今年私が教える科目は、選択科目として、二年の地理三単位、三年の地理三単位、三年の政経二講座三単位づつと、三年必修日本史三単位一クラスの計四科目十二種類となった。一年間やりぬくことができるだろうかという不安感のまま授業が始まった。生徒一人一人の反応をうかがう余裕もなく、一時間、一時間の授業をこなすだけで精一杯という毎日だ。

四月中旬進路指導部会がもたれ、進指内部での任務分担をめぐって話し合いがあった。初めての分掌であり、教科指導だけでパンク寸前の私は、三年障害研生徒の進路指導と就職指導の手伝いを部長に申し出たところ、管

理的にかなり疲れて、体調をくずし、最後には子どもの水ぼうそうがうつって二週間もダウンするはめになった。

この担任をやってきた三年間は、自分でもかなりテンションの高い所で仕事をやってきた感じがする。生徒指導においても、授業に對しても……。実際、その時、時は、「なんでもわし、こんなしんどいことせなあかんねん。もう、やめた」と思うことばかりで、夜中にふと目がさめ、生徒の事が頭に浮かぶと、心配やら憤りやらで、もう眠れなくなって酒をがぶ飲みするような状態だった。しかし、こういう状態こそ自分のテンションを高め、行動を活発にし、精神をはつらつとさせていたのではないかと思う。

生徒の行動一つひとつに對して、うれしくて涙が出そうになることもあれば、腹がたつてけんかをうっていったこともある。しんどい生徒が問題をおこす。彼らを学校から放さないためにどうしたらいいか、いろいろ迷う。彼らは、本当は学校が好きなんだけど、ちょっとしたことでも学校をあきらめてしまう連中である。担任の出方次第で、学校をやめていってしまうという微妙な判断を迫られる。しかし、テンションの高い時の判断はおよそ間違っていないように思う。

そうこうして三年間を送ったのだが、自分が本当に成長したというか、変わった。一人の

理職から就職指導の責任者ということが決められていることが伝えられ頭に血がのぼってしまった。(一昨年も昨年も部長が進学担当、数日後、校長室へ行き、教科指導の実状と今までの校務分掌の経験を話し、とても責任などおれないうことを校長に訴えた。校長の返事は、「なにごととも経験」「教科指導だけが教師の仕事でない」「皆で協力」であった。教師の悲鳴に聞く耳をもたず、多くの教師を学年所属からはずしておいて「皆で協力」とは何ぞとか。いっそうカッカしてしまった。

市芦で就職を希望する生徒の多くは、「学科試験」重視の企業にはほとんど行けていない。面接で生徒の就業意欲を評価してくれ、学校との信頼関係のある企業へ大半の生徒が就職しているのが実態である。

進指就職担当の仕事は、こまめに企業訪問

喜怒哀楽を共にする日々

市芦分会 田辺 哲

今年度は、三年間やってきた担任をはずれて、かなり楽になるんではないかと思っていたが、世の中、そんなにうまくはいかない。確かに、一人ひとりの生徒に對して気づかい

人間を、一つの物事を、実にいろいろな角度から見られるようになった。普通、しんどい生徒は表面上のいやな部分しか見えないのに、奥にあるかわいらしい部分とか、人間らしい部分が見えてくる。そうすると、互いに「おい、こら」の関係になって、信用できるようになる。

卒業式するとき、そういう子で、よくけんかもしたんだけど、その子が恥しそうに「先生一緒に写真うつそ」と言ってきた。一八、九才のつっぱってた男の子が、そんなロマンチックな、照れるようなことを言うのが、なんとなくほのぼのとした感じにさせられた。

うばわれてゆく「実感」

そういうテンションの高さを一度経験すると、今の状態では、精神状態がおかしくなる。まして、授業がうまくいってないときにいる。

今年度に入って、ほとんど授業だけでしか生徒と接しなくなった。その授業である。週十六時間であるが、一年が理科I(生物分野)が二時間×四クラス、二年生物三時間、三年生物二時間、三年物理三時間である。週に十時間分の教材を用意しなければならぬ。

こうなると、教材も安易に、教科書をまともめて、板書するだけになってしまふ。実験の準備をする余裕がないので、ほとんどやらな

をくり返し、就職希望の生徒のことをていねいに企業に伝えていくことである。そのためには進路担当、とりわけ就職担当教師への十分な時間的配慮がなされなければならない。そうでなければ生徒の進路保障への筋道が立たない。

今年の校内分掌は、生徒を気遣い、教師も労わるという配慮を一切欠いたまま実施されている。「責任者にはならない。協力はする」と豪語したものの事態は変わらず時間だけが経過していく。あと半月で七月となり、企業から求人票が送付されてくる。どうしたらよいものかと悶々としている。

体裁だけの「教育改革」を断行し、混乱と矛盾を引き起したのみで前田、井上両校長は市芦を逃げ去り、そのつげを負わされるのはかなわぬ。愚痴めいているが、個人的な(救援)通信だ。

をしながら、現在担任されている先生方を見て大変だなあと思うぐらい楽である。しかし、緊張感がない毎日、授業に対する欲求不満がつのつてきて、この二ヶ月ほどで精神

い。生徒たちは黙ってノートを写し、教科書を読めと言えば読む。でも、全然授業が受けていない、盛りあがっていない。こういうのは辛い。五十分が長い、長い。

ただ新しい知識を与えているだけだから、生徒にとってもおもしろいはずがない。だから発問しても、おもしろい答えなんか返ってこない。頭は他の事を考えているのだから、あたりまえだが、それでも、教師に文句を言うでもなく、ノートをとる。この生徒たちはもしかして、授業で物事がわかった、おもしろかったと実感したことがないのかもしれない。授業は、単に物を覚えるところだと思っっているのだろうか。

今までの生徒だったら、授業がおもしろくなかったら、「おもしろくない」と言うし、そのかわり、「何でこんなことになるねん」と聞いたなら、そこらじゅうから口々に、自分の経験だけで、「こうちゃうんか」、「そんならなんでそうなるねん」「うーっ、うーっ、こーやからちがうか」なんていうのがあった。こういうのは、教材がしっかりしてないのだめだから、年にそうはなかったが……。

あーあ、なんかおもしろい授業がしたい。今の授業の割り振りやったら、とっても無理や。誰かなんとかしてくれーっ！
と、まあ、最後は絶叫でおわりたいと思います。

外科病棟入院生活から

市芦第三回卒業生 井原 健

この四月に脳外科病棟に入院しましたが、六人部屋で会った若者と話すなかで人間の素晴らしさを感じた経験を書いておきます。

入院の翌日、U君が両親につれられて入ってきました。彼は高校二年を終えたところで、反抗期なのか親には突慥貪で、視線をかわせず、身体にくらべ声は小さく、手術まえもあつてか落ち着かない様子でもありました。手術後数日たって部屋に戻ってきたが、相変わらず人と視線をかわせない。わたしは、手術が延期になり一日中ベッドでゴロゴロしていたので、こちらから、いろいろと話しかけるようになった。手術についての共通の話題があるため気軽に話すことができる。痛み、恐怖など大抵同じような体験をするものだから。また、どの看護婦がいいかとか美人かとか、結構楽しいものである。そのうち、彼から視線をかわせて話すようになった。たがいに時間はいくらでもある。点滴中とか食事待ちとかなんにもしていないときが多いのでゆっくり相手の話を聴き、こちらで話すことができる。げらげら笑いながら、六人でにぎやかな

に過ごすこともある。だんだん日常生活にいても彼から話すようになった。

「学校にいきたくない、やめたい」
「ぼくも同じ頃そうおもったけれど、どうしてそう思うの？」

「希望校じゃなかったし、授業が面白くないし解らない」

「あと半年だから辛抱したら。でも、学校に友達もいるだろうから、遊びにいくつもりなら気楽だろう」

「友達なんかいない」

「そら淋しいな。なんか楽しいことないんか。家に帰ってからのことか、やりたいことあるやろ」

「家に帰っても、だれも居れへん」

「ほんなら何したいねん」

「何にもない」

「卒業したら何したい」

「専門学校いきたいけど学力ないし、就職せなしようない」

「どんな学校に行きたい」

「テレビ関係の学校。番組作りたねん」

「ふうん。ほんなら働きながら受験勉強すれば。どうしても行きたいなら浪人すればいい。就職するんやったらなにしたい」
「とくべつなんにもない。勉強も十分しか続かへん」

U君は孤独で、マンガとカセットテープとインスタントラーメンで毎日を過ごしているようだ。たしかに、ベッドのうえでもスナック菓子を食べている。いろんな面で充たされている感じがないように思える。

毎日いろんな話をしていると、計六人が兄弟家族みたいになる。すると彼に変化が出てきた。話し相手に、身体をむけ、視線をかわせるようになった。言語障害で聞き取りにくい人には、身を乗り出して、「なんて」と何度も聞きなおしている。笑顔である。そのうち、隣人が困っているのを見つけて、椅子を動かしたり、売店までかわりに買物をして行ったりするようになった。やはり楽しいところである。

ぼくらの禅問答

そうした姿を見るとこちらも楽しくなる。あいかわらず見舞い客には愛想がないが、同室者の世話は自分で見付けてやっている。人に関心が出てきたのだろう。そのころになって、「人間て魅力的だろう」と言うと、「う

ん」という。

毎日学校生活の悩みを話すので、聞いてみた。禅問答になる。

「勉強でなんやと思う」

「……………」

「あなたの今やっていることがそうなんや」

「……………」

「たとえばMさんにはこの床頭台が使いにくい、車椅子も不便だということが見えていると感ずるやろ」

「うん」

「そしたらどういふふうに動かしたり構造を変えれば使いやすくなるかを考え工夫するようになる。これが勉強・知識だとおもう。自分の学んでいることが同時にMさんを助けて喜ばせることができるんだ。ただ試験の点をとることが目的じゃないと思う。勉強、知識は傍にいる人間といっしょに生活するための大切な行為だと思おう」

こう言うと、「うん、うん」とうなずいている。翌日また私の傍まできたので、続きの話をした。

「Mさんは言葉がはっきりしないけれど、素晴らしいだろう。やさしいだろう」

「うん」という。よこからNさんも、「そ

うだ」という。「人間だれでも素晴らしい輝いているものを持って

るよ。ただ、人を理解して輝きを見付けるには、それを感じる力を蓄える努力が要る。数学も物理も助けになるよ。言葉を理解するのは国語も要る。もし、Nさんが外国人ならその語学もある。また同時に、自分の意志を伝えるのにも必要だ。そして人と話していると、互いの良き輝きが見えてくる。自分の持味・個性もわかってくる」

またNさんが、「そうだ、そうだ」と相槌をいれる。「まだ若いんだからこれからは無理でもできる」と、後遺症でよだれを流しながら不自由な言葉でU君を励ます。

彼U君は、初めての障害者たちと群れるなかで、なにかを見出しはじめた。すくく明るくなった。皆それぞれがった人間であること、障害の有無は大きな問題でないことが、当たり前のこととして見てゆけるのだろう。彼は学んでいる。

U君は、イソイソと朝から晩まで同室者の面倒を見て楽しそうにしている。同室者の様子にも気を配っている。

元気に退院

いよいよ退院許可が出たとき、彼は意外な反応をした。そのため同室者全員がどっと笑ったぐらいである。「まだずうっと居させてほしい」と一所懸命に医者説得するのだ。

退院したくても出来ない人々にとっては、特別のニュースがある。しゃべれない人、身体動かない人には憧れのことばである。みなそれぞれで彼を見ている。言葉で言わなくても、一時にせよ、心のつながりがあったことで、やさしく彼をとらえているのだろう。私には、病院という特殊社会に入っ

てやっと安らいだ気持ちになった彼の姿に涙が出てきた。
NさんとOさんは不自由な会話で論ずるのである。

「こんなとこに居たらあかん。元気に生活せん」と、はっきりとまたやさしくである。翌々日ベッドわきにきて言う。

「福祉の仕事したい。おれやりたい。こんな仕事したい」

このとき目は真剣に求めている。
私はびっくりばうに、答えた。
「福祉の仕事もたいへんらしいで。まあその希望を持って毎日過ごしたらどうや。急がんでも。まず普通の生活やってみたら。がんばって卒業して、人に出来ることを身につけたらどうや。いろんな人間に会ってみて道を探せばいいと思う」

いよいよ退院の日。喋れないひとも彼を見て頷いている。Oさんは「しっかり頑張りや」という。彼は「明日絶対にくるから、学校なんか休んで来るから」と、朝からしきりに言

っている。喧しい程である。皆笑っている。彼がいなくなった。三人が、「来るゆうてたな。」と夜寝るまで何回も独り言のように言っていた。

翌日、「来うへんなあ」とU君を待っているようだ。一日中そう聞かされる。私は、その都度、「元気に学校に行っただんでしょ。」という。淋しいけれど、その方がうれしい。」という。

この日私にも許可が下り、夕刻退院した。翌日外来受診に行き待っていると、彼がやってきた。私には気づかず、看護婦に何かいっている。「なんで来たん。来んでもいいんでしょ」とすげなく言われ、外来から消えていった。その姿は元気で声を懸けなくても心配ないものだった。彼は病棟にだけ行きたかったのが表情から解る。私も、後ほど病棟にいった。彼の姿はもうなかった。「やあやあ」と挨拶すると、「U君がシュークリームを持ってきた」と、うれしそうに手に柔らかないそれを持っていく。みんなが彼を待っていたことがよくわかる。元気があったそうである。たがいに、欠くことの出来ない貴重な存在として確認しあったのだろう。みんなの楽しい雰囲気にもまじって私もしばらくいる。すると、Nさんがわたしに、「早く入院してきなさい。にぎやかにしましょう」と言う。六人家族である。U君と同室者の関係は、助ける側と助けら

れる側という一方的関係でなく、身体の不自由な人によってすっかりU君の存在が支えられていた関係ではないかと思う。U君は自分がみんなに認められていることを身体で感じ嬉しかったのだ、と考えるのは思ひすぎだろうか。

見舞いにきた担任教師にはまったく口を閉ざしていた彼が、どうして同室者に自分から語りかけていったのか、心の中を素朴に見せていったのか、私自身にとっても大きな語りかけだった。信頼関係のなかで人間は教育され成長していくのだから、それがいいなら人間対人間の教育はあり得ないと思う。若い心を潰し殺すのが教育になってしまう。事務手続き上の問題しか語らない担任は、一体何を彼にしようとしているのか。

同室者のやさしさをすっかり憶えていてほしい。たとえ言葉が喋れなくても、やさしいまなざしは彼を育てる土となったのだから。そしてU君が隣人の輝きを発見してゆく楽しい毎日であつたらと願っている。

身体と心で感じ、語る

こうして書いていくと、以前情緒障害児と生活をともにしたことが思い出された。彼らはどうしているだろうか。U君のように希望をもって歩んでいるだろうか。私は生徒との

関係を突然絶たれてしまった。そのときは胸が張り裂けんばかりに悲しかった。身体は震えてとまらなかつた。若者に人間への無条件の信頼感をもたせたかった。人への不信感をもたせてはならない。生徒と教師は信頼関係の営みである。それを他者が勝手な都合で物理的に絶ち切ることに憤りを感じた。自分がそうされたからではなく、知らないうちに関係を無くしたその時の若者の悲しい表情を憶えているからだ。教育現場の主体は生徒である。生徒の輝きを感じ一緒に膨らませる助けをするのが、教師と生徒、生徒同志の関係であらう。

U君の担任は生徒との関係がもてるのに、どうして関係を拒否するのだろうか。若者の素晴らしさをどうして見ようとしなければならぬ。生きていく楽しさ、素晴らしさを共有できないのか。鰻頭を持ってきても、スナック菓子同様心は充たされずかよいあわない。今この生徒は悩んでいる。求めている。その姿がみえないのかと言いたくなる。目の前で悩んでいる生徒と一緒に生きなかつたら教師と言えないのか。言葉を変えると、この六人部屋の患者がU君の教師だったのではないか。よだれを垂らし、尿を漏らし、手や足の動かない障害者が、彼に人間の真理を自分たちの姿を通して語りかけたのだろうか。魂の叫びを同室者はうけとめあつたのである。

コーヒータイム

病院喫茶店でのお話、(実際よこで聞いたのです)

A 「なんか調子悪そうやな」
B 「うん、仕事でストレス積もらんけど、野球みとったらストレス積もるんや」

あたり前の労働運動をめざして

全通東灘分会 岡本正一

通信No.28でもお知らせしましたが、東灘郵便局での大量不当処分の中で、その撤回闘争の先頭に立っていた甲斐総分会会長が、四月二十九日突然の心臓死にみまわれ亡くなりました。全通東神戸支部は、五月三〇日、彼の追悼と、処分撤回の公平審闘争貫徹総決起集会を開きました。全通以外の多くの労働組合、地域共闘組織も参加しました。集会では、国労つぶしの後、現場の労働者に対するきびしい合理化攻撃の生々しい姿が語られました。郵政当局による「活性化計画」は、市芦における「管理強化」―「組合つぶし」―「生徒切り捨て」と同質であるとの市芦分会からの連帯の挨拶もありました。反彈圧闘争の中での「壮絶な戦死」といわれる甲斐氏の「屍」をこえて闘うという、全通の青年部の方の決意表明を寄せていただきましたので以下紹介しておきます。

亡き甲斐総分会長の分も含めて、闘う決意表明をしたと思います。

い甲斐さんが死ぬはずがない。当局に殺されたんだ」と。

私たちは三月二四日、二九名が処分されました。甲斐さんも戒告処分をうけました。亡くなる四月二九日、六時間前までは私たちと一緒に野球をしていたんです。私たち青年が集まれば言っているんです。「あのだ

私たちは公平審闘争を闘っていくことを決意しました。処分者だけでなく、全体で闘っていくことをです。公平審を闘っていくことには三つの目的があります。一つは、私たちにかけられた不当処分、亡

き甲斐総分会会長の処分を撤回させ、二度とそのような処分を当局に出させないことです。

二つめは、働き続けていく上で当然の権利である年休・病休をも認めようとし、郵政合理化(活性化計画)と闘っていくこととです。

三つめは、このような処分を出されても闘おうとしない全通総体を、まっとうな労働運動ができる労働組合にしていこうとあります。

私は今回、二度目の処分になります。何度処分されようが、やっぱり処分は恐いです。職場で、家庭で動揺がおこります。今まで名札をつけてない仲間がつけ始め、超勤もことわれなくなってきた仲間がいるんです。二時間の時間休ですら当局は認めないと言っています。今までものを言っただけでは組合員が言えなくなる、当局支配が処分を背景に職場でまかり通ることが何よりも一番恐いんです。

そのためにも公平審闘争をきっちりやり切ることが、甲斐総分会会長への何よりの供養であると思えますし、全国からの激励・連帯してくる仲間に応えることと思えます。

最後の最後まで、精一杯がんばりたいと思えます。

夏期一時金カンパのお願い

市芦救援会事務局

一九八六年秋以降、今日までの二年半余の反弾圧闘争の中で、会員の皆様方をはじめとして多くの方々から温かいご支援をいただき、ここにあらためて心から御礼申し上げます。

この間、市芦の組合員の三分の一にもあたる九名の教師が、教員身分を奪われて市教委事務職員として強制配転されています。

今春は、市内外の多くの方々のご支援の下で、二年続いた強配・入試での大量生徒切り捨ては阻止できましたが、「松本教育改革」は、通信前号でもお知らせしました様に、「学教審査会」にみられる「国際高校構想」として、新たな「教員・生徒切り捨て」を画策しています。

このような「教育改革」を許さず、九名の早期原職復帰を勝ちとるための公平委審理をさらに強めていくため、ここにカンパの要請を強くお願いするものです。

公平委審理はすでに十七回を終えています。が、審理廷闘争を支えるための法対諸費用、通信の印刷・発送等の諸費用について、共同購入等の独自財源の確保に努めておりますが、多くは皆様方の会費・カンパに頼らなくては

ならないのが現状です。

また、反弾圧闘争三周年をむかえる今秋に、闘争の中間的総括としてのパンフの発行を予

「教育改革」に抗して

学習交流会のお知らせ

市芦救援会
市芦分会

この二年半の反弾圧闘争の中で、「教育改革」、「行革」等の個々の具体的矛盾と格闘し、生徒の教育権保障のとりくみや、地域での教育合理化・行革攻撃と闘う人々と私たちは出会ってきています。それらの人々のとりくみに学び、「教育改革」に対する闘いを一層強化していくため、学習交流会を開きたい

と思います。

教育井戸端会議と称して、芦屋の教育改革を問う自由な討論をかわせたらと願っています。どうか多数お集まり下さい。

記

・日時 七月八日(土)午後一時半～四時半
・場所 芦屋市民センター 三〇三号A・B

活動日誌 〈抜粋〉 1988. 5. 16～6. 15

- 5・17 事務局会議。
- 22 教育共闘会議「教育臨調粉砕・狭山再審要求芦屋市民集会」とデモに参加。
- 25 麦の家事務局会議。
- 26 市芦分執・不服申立人合同会議(公平委審理をめぐって)。
- 29 事務局会議。
- 30 全通東神戸支部「甲斐君追悼・公平審闘争貫徹総決起集会」に参加。
- 6・1 東灘局解放研公平審傍聴参加。
- 7 「被解雇者……懇談会」に参加。
- 9 国労清算事業団支援物販実施。
- 11 「芦屋の教育を考える市民の会」に参加。

定しております。昨年発行しました準備書面抄「時を刻む」と共に、私たちの闘いを各地に広げ、多くの支援・共闘関係を結んでいく活動としてとりくんでいきたいと考えておりますので、このたびの夏期一時金カンパをよろしくお願いいたします。また、会費の納入につきましてもよろしくお願いいたします。同封の振替用紙を御利用下さい。